

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

大澤耕史

【所属】(助成決定時)

京都大学大学院人間・環境学研究科

【研究題目】

モーセ伝承を通してみる、ユダヤ教・キリスト教文学の比較考察—伝承の背後にあるもの—

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、古代から中世にかけてのユダヤ教・キリスト教文学の中で特にモーセに関する伝承群に着目し、その背景にある伝承者たちの意図を分析することにより、各文学に残された伝承の背後にあるものを明らかにすることを目指している。当時の学界を支配していたキリスト教的視点から離れ、ユダヤ教を「科学的に」研究しようというユダヤ学(ユダヤ教科学)が19世紀ドイツで興隆して以来、膨大な量のユダヤ教文学に対する研究が活発になり、多くの一次文献が日の目を見るようになった。しかしながらその文献の膨大さゆえに、ユダヤ教内在的な研究には膨大な蓄積がなされてきたが、より幅広く、ユダヤ教外文献も視野に入れた研究は、それほど進展したとは言えない状況にある。本研究は、これまでの豊富な一次文献(群)についての先行研究を踏まえた上で、一次文献の精読に基づいたユダヤ教文学とキリスト教文学との比較考察を行ってゆく。

【研究の内容・方法】(800字程度)

ユダヤ教文学について、ヘブライ語聖書はユダヤ教文学の根幹をなす文献であり、その解釈から派生して、様々な物語的要素が付加されたミドラッシュ・アガダーの両者を分析する。モーセ伝承の抽出のためには、主にイスラエル国ヘブライ大学が提供している歴史辞書およびそのためのデータベース(<http://hebrew-treasures.huji.ac.il/>)を使用する。これにより、11世紀までに成立したとされるヘブライ語文献群の中から、例えば「モーセ」という単語が使用されている箇所をすべて見つけ出すことができる。

続いて、上述のデータベースで特定できた文献を、印刷された校訂本で精読する。これについては日本では入手不可能なものがほとんどであり、それぞれの文献自体に関する二次文献も含め、国内外で収集する。

キリスト教文学については、新約聖書は言うに及ばず、教父文書についても日本における先行研究が充実しており、日本語訳が出版されているものも多い。そのためモーセに関する伝承を探して機械的に通読することが可能である。これはキリスト教文学における教父文書の重要性の反映であり、教父文書がキリスト教文学の重要な位置を占めているのは確実である。以上の文献を原典で精読し、それぞれの伝承においてモーセがどのように描かれているかを理解することが第一段階である。

続いて、第一段階で分析した各伝承の背後にあるものを考察する。具体的には、ユダヤ教文学において、疑いなく偉人であったモーセが、一貫してそのような人物として描かれているかどうか、仮にそうでないとしたら、代わりにどのような描かれ方をしているのか。キリスト教文学においては、同じく偉人(聖人)でありながら同時にユダヤ教の象徴でもあるモーセをどのように描いてきたか。この二点に注目して、各伝承を評価していく。特にキリスト教文学においては、「敵」のことは悪く描きたいが、「仲間」を悪く描くわけにはいかないという複雑な感情が生じていたと考えられるため、単純に好意的／悪意的という構図以上のものが見られると予想する。ユダヤ教文学においても、キリスト教ではなく自分たちのユダヤ教が「正当な」モーセの(正確には神の)教えであるというような主張が読みとれることが予想される。

【結論・考察】(400字程度)

事前に想定されていた通り両陣営におけるモーセ伝承のすべてを助成期間中に調査するのは不可能であ

ったが、以下の点が確認された。1) ユダヤ教文学においては、基本的にモーセを偉人とみなし、その人物や行動を好意的にとらえているが、モーセを神のように崇めているわけではなくあくまで一人の人間として描いている。2) キリスト教文学においては、イスラエルの民(ユダヤ人)を否定的に描くことはあれどモーセをそのように描く伝承は見つかっていない。3) いずれの側もモーセを偉大なる人物として描いているものの、ユダヤ教文学においてはユダヤ教の指導者として描くのに対し、キリスト教文学においては、ユダヤ人が神にそむいた一方でキリスト教徒は真のイスラエルとして神に従っているという文脈において、自分たちの偉大な先祖という描き方をしている。以上三点から結論として、両者ともにモーセを偉大な人物として描いているが、その背後にユダヤ教はユダヤ教を、キリスト教はキリスト教を見ていると言えよう。